

横浜の地場産業 ——スカーフ産業を中心として——

影 山 穂 波

本稿は、地域に根差した地場産業という観点から、スカーフ産業を考察している。横浜という一地方都市の中で、地場産業であるスカーフ産業がどのように発展してきたか、その生産構造、また動向について調査・研究することを目的とし、組合・各工場での聞き取りを中心に、市の統計・産業の研究書・論文をもとに執筆した。

横浜は、首都圏の中核都市で、開港により栄えていった地域である。開港により世界市場に解放され、日本の商品の中心地となった。そしてスカーフ産業は横浜の開港と関連して発展した。また横浜は、新しい都市づくりに関する技術をいち早く移植し、新知識や情報の流入と合わせ、経済・文化面でも先駆的な役割を果たすこととなった。商業貿易都市から工業都市へと発展を続けたが、敗戦後は、首都圏の国際港、重化学工業・機械工業地帯、巨大なベッドタウンとしての役割を果たすようになり現在に至っている。

横浜のスカーフ産業は日本のスカーフ生産の9割を占め、世界的にも屈指の生産地である。生産体制は、受注生産による分業体制をとっており、多数の中小・零細工場によって生産体制が形成されている。型・捺染・水洗・縫製といった下請け生産部門は製造業者に付随しており、各工場はある程度、系列化されている。

横浜で輸出向けの絹手巾が地場産業として成立した理由としては、輸出の売り込み先となっていた外国商館が横浜の山下町に集まっていた、こうした商館から継続的に絹手巾の注文があったこと、その外国商館の近くに輸出絹物売り込み商が事務所を構えていたこと、縁かがりなどの内職の労働者が横浜市内で容易に得られたこと、大岡川・帷子川の2つの河川の存在などがあげられる。

工場は、大岡川・帷子川の周辺に集まる傾向にある。輸出商社・生地問屋は業種内容から、港が近く取引しやすい中区に多い。製造業者は、大岡川・中村川の下流部に集中しており、捺染業は、

大岡川上流部の南区・港南区、帷子川上流部の保土ヶ谷区・旭区に集中している。金沢工業団地には、アパレルパークとして関連工場が集積している。

横浜のスカーフは、輸出向スカーフと内需スカーフと大きく2つに分けられる。輸出向スカーフは伝統があるが、現在輸出量は激減している。スカーフの流行性や他の諸国の発展にともない衰退しているのである。北米は輸出先として常に重要であったが、最近では輸出市場が分散している。素材はほぼ化繊と絹に二分されているが、それでも絹は重要である。そして輸出・内需ともに製品は高級化してきている。

横浜のスカーフ産業が抱えている問題としては、立地問題、敷地狭隘、公害問題、労働者・後継者不足、経営難などがある。スカーフ産業は受注生産、分業体制によって現在までの発展を見せたが、各工程と問屋との力関係、分業体制の中で生じてくる歪みなど、その生産体制も問題を抱えている。その中で、企画力の欠如も重要な課題となっている。

これらの諸問題に対し、工業団地への移転や地方への進出、諸事業への発展、捺染の味を生かして、ハンカチ・服地・こいのぼり・傘などのスカーフ以外のプリントの拡大、協業化、機械化や自動化への動きなど懸命な努力もなされている。しかし、改善はなかなか進まず、困難な状況下にある。

横浜の産業の中で、スカーフ産業の占める位置は決して大きいものではない。しかし横浜唯一の地場産業として、地域に根差した産業、貿易振興のための産業となっている。そして、立地の良さ・生産構造の長所などを生かしながら、山積する課題には積極的に対処しつつ進展してきているだけに、これからも一層の発展が期待されている。